

漢川行 (其の四)



夔州

夔州(現在の奉節)は李白や杜甫の詩に詠まれ、歴史の跡を残す名勝の地だったが、三峡ダム建設により住人の大規模移住が行われ、多くの部分が水没した。

戦士の母

巫峡(四川三峡の一つ)は静かに通り過ぎた。この有名な景勝の地は残念ながら険しいその後ろ姿が見えただけだった。

正午過ぎてすぐに夔州(クイジョウ)に着いた。急いで文姉さんとあの妊婦と一緒に岸に上がり、かなり高い山の上の街まで登っていった。五分(分は100分の1元)渡して一人の少年に道案内をしてもらうことにした。少年はこのあたりに詳しくて、私たちを一軒の家に連れていった。

家の主は善良そうな老夫人だった。私たちが沐浴させてほしいと来訪の目的を告げると快く応じ、丁寧に私たちをもてなしてくれた。古くなっているがきちんと整頓されている寝室に入ったとき、すぐに机に置かれている一枚の若い将校の写真が目にとまった。写真の上部に二行の端正な文字が書かれていた。

「年老いた慈悲深い母に！ 前線で鬼子(グイズ)と戦っている次男が、功德となりますように謹んで贈ります。」

これに私の好奇心が引き付けられた。沐浴したあと外にある部屋で老夫人に話しかけた。

「寝台の前にあるあの写真は息子さんですか？ 今どこに？」と聞いた。

「ああ」と老夫人は歯の無い口を横にして嬉しそうに言った。

「次男です。去年の夏にやっと南京軍官学校を卒業し、八月に私に会いに帰ってきました。日本との戦争が始まったばかりのときで、教官から『軍に入ったら参謀にする』という誘いの電報が来ました。あの子は、私が悲しむのを心配して行きたくはありませんでした。でも私には分かっていました。国家に忠義を尽くす道理は私にも理解できました。私はもう年をとり、そばには親しい人もいませんし、長男は万県①で仕事をしています。一人娘はまだ学校で勉強しています。でも私のことは小さな事、国家のことは大きな事です。戦争が終わって帰ってきてから私といてくれても遅くありません。私はそう言ってあの子に行くことを勧めました。それでやっとあの子も安心して行きました。

九月に上海が陥落して、それから三か月も手紙がないなんて、思ってもいませんでした。とても心配でした。今年の正月にやっと徐州②からの電報を受け取りました。負傷していたんですよ。傷が治ったあと、また大戦に参加しました。自分で兵を率いていたのです。台兒村③では大隊長になりました。あの写真は先月送ってきたのです！ ええ、息子はまだ三十歳ですけど、勇敢で、親孝行なんです！」

老婦人はゆっくりと語り、たびたびうれし涙を流した。私は感動し彼女に恭しく言った。

「あなたは本当に偉大な母親です、おばあさん！」

「とんでもない！」

老夫人は首から数珠を取って私に見せた。

「毎日精進潔斎④してるんですよ。お国の勝利を祈って、息子が無事に勝って帰ってくるができるように！」「それは確かなことですよ、おばあさん。安心してください。中国が失敗するはずはありません。あなたの勇敢な息子さんはすぐに勝利して帰って来ますよ。」 おばあさんは満足そうにうなずいた。このとき文姉さんが出てきたので、私たちは彼女にお礼を言い、お金を渡した。しかし彼女は、息子は前線でお国のために戦っている、自分は後方で難儀している同胞を助ける義務があるのだ、と言って受け取るのを再三拒否した。何と賢明で尊敬に値する母親なの

だろうか！ 私たちは彼女に別れを告げた。彼女が元気に門の前に立って私たちに手を振っている姿が、ずっと遠くから見えた。もしすべての母親が彼女のようななら、中国にはさらに希望があると思わずにはいられなかった。

- ①万県……現在の万州区。重慶中心部から北東 374km の距離に位置する。
- ②徐州……江蘇省北西部の都市で、1938 年には日中軍がここで対戦し、1948 年に内戦で人民解放軍が国民党軍に勝利した所。
- ③台兒莊……徐州に隣接している山東省棗莊市にある町。北京と上海を結ぶ鉄道幹線上にあり、運河が町の背後を流れ、水上交通の便がいい。日本軍がここで国民党軍の抵抗にあい撤退を強いられた。この戦いは中国では「台兒莊の大勝利」と呼ばれている。
- ④精進潔斎……不浄なものを避け、心と体を清らかな状態に保つこと。具体的には肉食しないことが含まれる。

途中観光

その日の晩、私たちは港の茶館で茶を飲んで涼んだ。偶然大雨が降った。ほかの旅客は次々と船に戻ったが、私と文姉さん、妊婦の女性三人はずっと茶を味わいながら世間話をした。雨が止み、夜廻りが銅鑼(どら)を三回(午後 11 時または午前零時からの 2 時間)たたいた。夜遅くに乗船するつもりだったが、茶房が言うには、明朝七時にならないと渡し船が出ないそうだ。どうしようもない。それぞれたいまつを一本ずつ持って、ゆっくりと石段を降り、一元で小舟を雇い、船の中で夜を過ごすことにした。

小舟がそよ風に揺られ、揺籠のようだった。中にいて寝ていると、子供のころの記憶が蘇り、夢に酔っていた！空から流星が落ちてきた。果てしない暗黒の長江の夜の景色は、特別に物寂しい。うとうとして眠りに落ちようとしていたそのとき、また雁の鳴き声で起こされた。時節は寒露(十月八日または九日)でわずかに寒く、周囲は静かで、北方の故郷を仰ぎ見てため息をつき、とつぜん家を想って二粒の涙がこぼれ落ちた！

翌日もひどい暑さが襲ってきた。具合が悪くなった。頭痛がして息苦しく、体がきつかった。今回は文姉さんもとてもびっくりした。幸いにも立っていることはできた。仁丹を少し飲み、万金油(メンソール入りの塗布薬。清涼油の旧称)をつけていくらか良くなった。夜になると船は万県の手前、忠県にある小さな港に泊まった。文姉さんは

ボートを雇い、私を支えて岸に上がった。一人の老婦人が、まるで私たちが来た目的を知っているかのように、自ら「沐浴に来るように」と私たちを招いてくれた。

彼女の家に行くための大きな道はなく、川の水が引いたあとにできた道に行くのだが、砂混じりの泥地で、途中で沈み込む危険があった。しかし老婦人は少しも怖がる様子がなく前をどんどん歩いていく。文姉さんも何とか歩くことができたが、私だけはひと苦勞だった。全身汗だくになり、一歩ずつ歩いていき足が疲れてしまった。もし老婦人が助けに来てくれなかったら戻るしかなかっただろう。

ここは農家だった。家の外に野菜畑があり田んぼがあった。とても裕福な様子だった。婦人は私たちを家の中に連れていき沐浴させてくれた。蚊に刺されて跡が付いたものの、とても気分が良くなった。何人かの近所の女性たちに話しかけて、空襲警報がないか尋ねたら、彼女たちは私が何のことを言っているのかよくわからないようで、「東洋人って何？」と聞かれた。奇妙な気分だった。ここには学生がいないのか？ どうしてほんのわずかの抗日戦の宣伝さえ行っていないのか？

日が暮れてきて船に戻るときも、またぶらぶらと散策しながら二つの通りを歩いていった。幸いなことに同じ船に乗っていた顔見知りの旅客と会った。もし会っていなかったら無事に船まで帰りつけたかどうかわからない。もとの道は行く度胸がなく、かといって別の道はよくわからず、それに月の光も灯りもなかった。

旅の道連れが懐中電灯を持って前をいき、私たちは後ろを付いていく。真っ暗な森や草の茂みを通して、ここには悪魔が隠れているような気がして、心の中で縮みあがっていた。坂を下るとき、私はついて行くことができなかった。靴底が滑るし、大波が打ち寄せている長江の川面を見ると怖気づいて、しゃがみながら少しずつ行くしかなかった。文姉さんはこれを見て大笑いしていた。

乗船すると、全身汗をかいたせいか病気が消え去っていた。

翌日早朝、船は豊都県には止まらずに過ぎた。迷信があって、ご婦人方や男性たちはみな我先に身を伏せて、船の縁から見ていた。口をそろえて言うには、あそこは死人の街で、人が死んだら必ずあの世の豊都城に行かなければならないのだそうだ。これはまったくのでたらめだ！

ぼんやりとして一日寝て過ごし、食事もしなかった。夜、船は涪陵近くで停泊した。港までは二十里以上もあったので岸に上がることはできなかった。次の日の午前中には目的地に着くはずだという話だった。重慶まであと二百里ちよっとのところまできた。茶房はお茶の代金を取りにきた。私と文姉さんは二人で四元を渡して彼に荷物の

まとめをしてもらった。困難だった旅がもうすぐ終わるかと思うと、この上なく気分がよくなりました！

山上の都市 重慶



約三時過ぎごろ、船は重慶の民生埠頭（朝天門埠頭）に停まった。船の端にいた旅客が、彼らを迎えに来ていた親戚や友達の姿を岸の上に捜しだしていた。私も思わず岸の上にいるかもしれない友人の姿を探した。友人がこの人の群れの中から私を呼んでいるはずだと思ったからだ。だがかっかりした。一人も知っている人の姿が見えなかった。

私はすぐに考えた。ひょっとしたら友人はだれかに頼んで客室に迎えにきてくれるかもしれない。私は船室の番号をはっきり書いた手紙を送っていたからだ。しかし、ずっと待ちつづけて旅客がすべて船から下りてしまったとき、私はあきらめて岸に上るしかなかった。船を下りてから岸以外のどこに行けるというのだ？

もう旅館はどこも満室だということだった。漢口にいたときに友人が“沙利文”という名の旅館のことを話していた。私はすぐに運搬人を探して荷物を埠頭に上げ、沙利文まで運ばせることにした。幸いなことに運搬人は沙利文を知っていた。住所を聞いていたが、私にはどの通りを行けばいいかもわからなかったのだ。

運搬人は荷物一つに三角(角は10分の1元)を要求し、“沙利文”まで運ぶと請け合った。煩わしさを省くために彼の言うようにした。私と文姉さんは駕籠を雇って乗っていくことにした。道がすべて高い石段の坂になっているので歩くのはとても難儀だっ

たからだ。運搬人は荷物を背負って前の方を行き、駕籠が後ろを行っていたが、やがて荷物が見えなくなった。

このとき突然、運搬人から領収書をもらっていないことを思い出した。ただ一枚の細い番号表だけを持っているので、もしも逃げられたらめんどろなことになるではないか。私たちが“沙利文”に到着してからかなり経ったが、荷物はまだ届かなかった。部屋も満員だということだった。それで文姉さんとレストランで軽食を取るしかなかった。友人に電話を一本入れたが、日曜日だったので仕事をしていなかった。それからいろいろな旅館に電話をかけたが、答えはただ一つ、「満員です」だった。

荷物はないし部屋はないし、どうしようかと焦っていたところに、ちょうど運搬人が荷物を運んできた。荷物が重かったのでゆっくり歩いてきたという。私は彼に感謝のことばをかけた。しかし泊まる問題は どうしよう？ 文姉さんは私を見、私は文姉さんを見た。判断に迷っているという感じだった。避難民が流れていくときの困難は次々と出てくる。「死んだほうがましだ」と思わせるほどだ。

このとき、一人の茶房が同情してくれたようで、近くの風呂屋で泊まれるように交渉してくれた。それでまた駕籠を雇って荷物を運んでもらい、私たちは数十段を登っていった。上ったり下ったりを繰り返して風呂屋に到着し、階段を上ってやっとかなり良い部屋に泊まることができた。しかし茶房が言うには、すでにほかの人が予約しているので泊まるのは一日だけだということだった。一日でもいい。どのみち明日になれば方法が見つかるだろう。一時的にでも滞在できる場所があったのだ。

夜、入浴して散髪して、かなり爽快な気分になった。私は賑やかないくつかの通りを見物しながらぶらぶら歩いた。照明が光り輝き人の声が騒がしく、大都会の天下太平を謳歌している光景がそこにあった。大通りはなめらかだが突然高く突き出ているところがあり、また低く凹んでいるところもあり、人力車を走らせている者は心配しながら走らせている。特に下り坂のときには注意が必要だ。つまりいたりすると百フィートも先に行くことになる。重慶は山岳地にある都市で、これが重慶の特色になっている。足でその家の屋根を踏むことができるような下の段にある家もあれば、全市内を見下ろすことができるほど高い所にある家もある。いつでもどこからでも長江と嘉陵江を見ることができて、この「天府之国」^①にある山上の都市は山と川に囲まれ、毅然として立っている。

重慶の暑さは特別で、漢口と比べても暑い。ここでは銅貨が流通していて1枚が200文である。銀貨一角（10分の1元）が2400文なので1元が24000文（銅貨120枚）。これにはちょっと驚いた。

肉体労働者たち痩せていて皮膚が黄色くなっている者が多く、アヘン中毒になっていることは明らかだった。そのような彼らの姿はどこにでも見られた。彼らは気力を高めるためにアヘンを吸い、吸わなければ気力が減退して仕事ができない。それでアヘンを買って吸うことが習慣となり、アヘンを吸えば吸うほど貧しくなるのだ。

重慶は、最初のうちはこのようなぼんやりした印象だった。この、政治、経済、文化の中枢地となった新しい首都が、北京や上海の表皮をはおるだけでなく、北京や上海のあの革命の魂と抗敵の精神を有することを私は望んでいる。山上にある都市はもともと堅固で、現在のように武装しなければならない状況になると、当然のことながらさらに難攻不落となる。「武漢を守れ」の声の中、大後方にある重慶が人々の団結を促し国家振興の役割を果たしてくれることを祈っている。

①天府之国…… 「土地が肥沃で物産が豊富な所」の意味で、一般に四川省のことを指す。

一九三八年九月 重慶にて

□□□□□